

R1 SG 台湾 FW

11/14 (木)

本日からいよいよ政治大学での研修が始まります。ガイドの黄（コウ）さんに連れられて、地下鉄とバスを乗り継いで政治大学国際会館へ。

国際会館では、まず副所長の蘇教授から歓迎の挨拶をいただきました。次に、昨年度もお世話になった主担当の李さんと二人の学生ボランティアから、オリエンテーションをしていただきました。学生さんは期末テストの最中で忙しい中、我々のために時間を割いてくれました。カムシャ！

その後、学生ボランティアに連れられて、午前中は政治大学の構内を歩きます。

戻ってみると、部屋にはショッキング・ピンクのかわいい箱とタピオカミルクティーが。箱の中には野菜たっぷりヘルシーな春巻きと茶碗蒸し、そしてお茶ケーキという充実のお弁当！

午後はいよいよプレゼンテーションです。日台の観光政策に明るい日本研究学の李教授をお迎えして、岡崎・三ヶ森ペアと田原・中田ペアがプレゼンテーションを行いました。

岡崎・三ヶ森ペアは、万人にとって住み良い社会を探究していますが、それぞれ異なったアプローチをとっています。岡崎は視覚障がい者が住みやすい社会インフラをどう整えていくかについて。盛岡視覚支援学校でのインタビューを元に、財政的な地域格差に起因する視覚障がい者を取り巻く地方の現状を説明、地域格差に左右されない手立てとして情報技術が鍵になるのではないかと提言しました。アジアでも特筆すべき IT 大国台湾で、具体的な解決策を見出したいとのことです。三ヶ森はストレスに満ちた現代社会において、心身の健康には自然との触れ合いが重要だと述べ、地方都市においては自然との共存の可能性、都会においてはグリーンビルディングの可能性に言及しました。

李先生は、万人にとって望ましい生活環境とはバリア（障壁）フリー（無い）であり、その障壁には物理的障壁と心理的障壁の二種類あると説明。物理的障壁の問題を考えると、日本の内閣府が推し進める **Society 5.0** の発想が大事だよ、と岡崎に宿題を出しました。心理的障壁はコミュニケーションにおいて、主に言葉が通じないことに端を発しますが、これも情報技術の進展、例えば翻訳ソフトの発達状況が状況を改善するのに役立つだろうと教えてくれました。また、三ヶ森の言う「自然の持つ癒しの力」の大きさに賛同してくれました。台北は山、川、海、温泉へのアクセスが良く、自然との共存という意味で良い参考例になるだろうとのことです。

田原・中田ペアは子どもの遊び場を充実させることで、盛岡に賑わいをもたらしたいという探究を行なっています。まずは社会的な背景として、台湾と日本、両国が共有する少子高齢化を大きな課題として取り上げ、副次的な課題として家庭の在り方に言及しました。高度経済成長以降、家庭のロールモデルとして、夫婦分業が日本に定着しました。経済状況の変化や女性の社会進出の影響で、近年はそのモデルが崩れ始めていますが、まだまだ職業観における性差は根強く残っています。一方で台湾では夫婦共稼ぎが一般的です。こうした背景を踏まえ、日台比較をしながら、現代に見合った、新しい子どもの遊び場を模索したいと述べました。

李先生は子どもの遊び場について考える際、子どもの年齢も考慮に入れた方が良いと助言。発達段階によって、近所の公園を好んだり、動物園を好んだり、遊園地を好んだりと様々だと教えてくれました。また、未来の子どもの遊び場として、気候や天候に左右されない、全天候型の室内遊園地というアイディアも授けてくれました。

その後、議論はジェンダーの話題に広がりました。李先生は、少子高齢化と地方創生という課題において、鍵を握るのは女性であると言います。台湾の女性は経済的に自立しているため、日本とは違い、台湾社会において昔から発言権を保有しているのです。

とまれ、李先生には両ペアともおもしろい視点で探究を進めていると、ほめていただきました。昨晚遅くまで練習した甲斐があったというものです。

最後に李先生から「Youは何しに台湾へ」と題して講義をいただきました。京都大学で6年間学び博士号を取得された李先生には、とても流暢な日本語でご講義いただき、これには生徒達も胸をなでおろしました。「今回、君達は研修で台湾を訪れているけれども、もし観光で来ていたとしたら、何が目的になるだろう？」という問いかけから始まりました。生徒達は「九份!」「タピオカミルクティー!」と答えましたが、日本人がイメージする「九份」や「タピオカミルクティー」と、台湾人のそれらの認識は完全に同じでしょうか。きっと重なり合うところもあれば、ズレているところもあります。実際、台湾の人は九份は外国人観光客で混雑しているのであまり行かないし、小籠包も高いからあまり食べない。ちなみにタピオカミルクティーは、全ての世代が小さい頃から慣れ親しんでいる大好きな味だそうです。李先生は今回、「日本から見た台湾」と「台湾から見た台湾」、「台湾から見た日本」と「日本から見た日本」、それらの認識の共通点と相違点を整理することで見えてくる、観光戦略についてお話してくださいました。

我々が「台湾」と聞いてイメージするものは何でしょう。台湾は2011年からずっと、日本人が訪れたい国の最上位にランクされています。なぜこんなにも台湾は我々日本人を惹きつけてやまないのか。李先生は、「日本から見た台湾」と「台湾から見た台湾」の認識のズレに答えがあると示唆します。台湾では観光スポットが地域ごとに整理されており、かつ交通インフラも整備されている。グルメは主だったホテルの周辺に食べたいものが揃っていて、コストパフォーマンスも良い。現地の人との出会いも良い旅の思い出には必要不可欠ですが、台湾人のおもてなしには「大丈夫だよ」を表す「メイグワンシー」の精神が隠れているとのこと。李先生が教えてくれる観光地としての「台湾から見た台湾」は、我々日本人が無自覚に、しかし確実に実感している魅力の源泉でした。

質疑応答で熱を帯びたのは、互いに何をお土産に持ち帰ってほしいかという話題。台湾チームからは梅干しとフルーツビール、日本チームからはかもめのたまごと南部せんべいが挙がりました。

そして再び、女性の働き方や社会的役割に話が及びます。台湾は、女性という労働力なくして、経済や政治などの社会機構は成り立たないという前提に立っています。日本ではまだまだそうした意識が定着していないため、ここにいると、女性が当たり前活躍している姿が、とても新鮮に映ります。

お土産に目を向けてみましょう。その主たる消費者は女性です。たとえ購入者が男性だとしても、それを受け取って使用したり食べたりするのは女性。それなのに、日本では誰がそれをデザインしているのでしょうか。台湾のお土産は包装に凝っており、観光地もとてもポップで魅力的に装飾されています。女性をターゲットに、女性がデザインする。日本では未成熟な発想です。でもその分だけ、女性が活躍する可能性を秘めた大きなフィールドの一つだと実感できました。今回の訪問団の内、12人全て女子生徒。彼女達に希望と勇気を与える、素晴らしい機会となりました。





